

5) 尿路性器癌化学療法に対する支持療法としての γ G-CSF の効果

照沼 正博・木村 元彦
富田 善彦・谷川 俊貴
川上 芳明・笹川 亨
西山 勉・佐藤昭太郎 (新潟大学泌尿器科)

各種尿路性器癌化学療法後の白血球減少症に対して rhG-CSF を使用したのでその効果について検討した。同一の化学療法を2回以上繰り返す症例で、1回目は対照観察期、2回目以降を rhG-CSF 投与期とし、投与量は $75\mu\text{g}$ または $100\mu\text{g}$ を皮下注した。対象症例は睪丸腫瘍6例、尿路上皮癌5例で、化学療法はそれぞれ PVEB または PE 療法、M-FAP 療法を行った。結果はいずれの化学療法でも rhG-CSF 投与群で白血球数最低値の上昇、白血球減少期間の有意な短縮が認められた。また化学療法各コースに繰り返し使用した場合でも、対照観察期に比べて白血球減少期間は有意に短縮していた。以上から rhG-CSF は癌化学療法後の白血球減少の改善に有用であると考えられた。

6) 松果体領域胚細胞腫の治療成績

高橋 直也・土田恵美子
稲越 英機・酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)
鷺山 和雄・武田 憲夫
田中 隆一 (同 脳神経外科)

1980年から1988年までに新潟大学医学部附属病院で新鮮放射線治療を行った松果体領域胚細胞腫14例について、再燃の有無とその様式を調べ、さらに播種再燃の危険因子ならびに治療との関連を検討した。

再燃は局所再発(再発時組織像は胎児性癌に変化)1例のみであり、5年非再燃率、5年生存率、ともに93%であった。

治療前所見として、① CT 像で seeding (3例) や複数病巣 (2例) が5例、② 髄液細胞診陽性が12例中5例、③ HCG 陽性が12例中4例、に認められていた。また照射前に、④ 摘除や開頭生検が7例に行われていた。これらをすべて播種再燃の危険因子であると仮定すると(③を除いても同様)、高危険群は11例であった。

高危険群にはすべて全頭蓋や全脳脊髄の照射が実施されており、広範囲照射が播種再燃の予防に寄与したものと考えられる。一方、低危険群には脊髄照射は実施されおらず、この場合には本方針でよいことが示唆される。

7) 女性ホルモン剤によると思われる肺塞栓症の1例

岡田 義信・佐藤 正之 (県立がんセンター)
堀川 絃三 (新潟病院内科)

女性ホルモン剤によると思われる肺梗塞症の一例を経験したので報告する。症例は、64才女性で、昭和42年に右側乳癌を手術した。現病歴は、平成1年6月に右肩に腫瘤ができ生検で乳癌の再発と診断された。5-FU などの抗癌剤の投与により寛解し、8月より medroxyprogesteron acetate $1200\text{mg}/\text{日}$ と tamoxifen $30\text{mg}/\text{日}$ を投与された。12月より左下肢の腫脹と息切れが出現し入院した。PO2 67mmHg 、PCO2 34mmHg で、血液凝固能を示す TAT の高値、血管造影で左下肢静脈と右側肺動脈の閉塞を認め、静脈血栓・肺塞栓症と診断した。腫瘍血栓は否定的であった。これら二剤を中止して症状は消滅し、PO2、凝固能は改善した。また、乳癌は再燃せず、現在通院中である。以上より、これら二剤による血栓症と考えられ、稀な症例と思われた。

8) 卵巣癌再発症例に対する CDDP low dose/Acracinomycin 療法の検討 第2報

遠岡 浩・建部和香子
花岡 仁一・竹内 裕 (新潟市民病院)
徳永 昭輝 (産婦人科)

1. 再発卵巣癌患者4例、原発不明癌患者2例につき CDDP 低用量療法を施行し、その効果および副作用について検討した。

2. 腫瘍縮小評価としては、CR 2例、MR 1例、NC 2例、不明1例であったが、PS は1例を除きすべての症例で改善が認められた。

3. 副作用に関しては、悪心嘔吐等の患者の苦痛は軽度であったが、骨髄障害、腎機能障害は従来の FCAP 療法と同様に認められた。

4. CDDP 低用量療法では、CDDP 血中濃度がピークに達するまで FCAP 療法の144倍の時間を必要とし、直線的な増加を示した。

また、白血球減少および血小板減少は20~30日目に最高に達した。

5. CDDP 低用量療法は、IVH 施行により全身状態の改善をはかることにより末期癌患者に対しても延命効果は期待できるが、今後は副作用の軽減のための投与方法の改善、長期治療のための工夫が必要と思われる。